

---

# 女子大学生の首尾一貫感覚 (SOC) に レジリエンス、リーダーシップ自己効力感や 制御焦点理論が与える影響

---

高橋 桂子

## 1. 研究の背景と目的

明治22 (1889) 年7月8日、華族女学校第1期卒業式にて当時36歳の下田歌子は「女の徳は、寒松の霜雪に堪え、垂柳の暴風に折れぬ力にも譬え、柔かなる中にも、一節犯し難き所あるべし。総じて内は剛に、外は柔なるぞよき」という言葉をおくっている (故下田歌子先生伝記編纂所 (1943, p. 278))。降り積もる雪に松が、暴風に柳が折れないように、柔軟に、そして気品をもつことが女性の徳である。大地に深く根が張った太い幹のような特性を持ち、周りを気遣える優しさがああり、直面するであろう逆境にあってもしなやかに対処できるような特性を備えよ、大事にせよと、社会に飛びだそうとしている女学生たちに下田は説いたのである。

下田の「内は剛に」の教えに近い概念の1つに、首尾一貫感覚 (Sense of Coherence、以降、SOCと略記) がある。山崎・戸ヶ里・坂野 (2019) によると、SOCとは「自分の生きている世界は首尾一貫している、という感覚」 (同、p. 3) であり「環境と主体である人との相互作用からなる生活世界へのその人の志向性 (orientation to life)」 (同、p. 11) を捉えた概念であり、「人が、広範囲にわたる、力動的ではあるが永続的な次の3つの信頼の感覚を持っている程度を表す、包括的な志向性」 (藤里・小玉、2011) と定義される (詳細は後述)。

SOC概念を提唱したAaron Antonovsky (以降、アントノフスキーと略記) には、「ストレスは生きていくうえで避けられないもの、それどころか、「嵐は若木を鍛える」など多くの格言」 (山崎・戸ヶ里・坂野、2019, p. 9) があり、「それらは疾病再現可能性とともに成長促進可能性をもっているという見解や、それらと向きあうことなしに人間の成長はないという見地がある」 (同、p. 9) と記している。この点も、SOCは下田の「内は剛に」と親和性の高い概念の1つといえる。

本研究は、SOCに着目し、本学女子大学生のSOCに関する基礎的資料を収集するための研究である。少子・高齢化、AIとの共存、VUCA (Volatility; 変動性、Uncertainty;

不確実性、Complexity；複雑性とAmbiguity；曖昧性)の時代、そしてコロナによる新しい生活様式へとパラダイム転換を迎えた今日、高度経済成長期を生きた祖父母世代、バブル経済を生きた親世代とも違う時代を生きていく。新たな社会環境に適応するためには、ストレス耐性が高いことが必要条件になる。ストレスに対処するには、ストレスラーや自分がおかれている状況がわかり、対処すれば何とかかなると思えて、そして自分は現実社会で実際に行動にうつすことが出来る、という一連の感覚を持てることが大事である。このSOCの感覚が高い者ほど、就職活動における成長感にプラスの影響を与えることが示唆されている(藤里・小玉、2011)。高いSOCを持つことは高いレジリエンスをもつこと同様に、人生を切り開く1つの鍵になると考える。

そこで本研究では、SOCをテーマに基礎的資料を収集する目的でアンケート調査を実施する。SOCをテーマとする研究は筆者らにとり初めてということもあり、SOCの分布状況、類似概念との関係をさぐることに主眼を置く。

以下、構成は次の通りである。続く第2章では、使用する4つの概念の定義とSOCに関する先行研究の整理を行う。第3章ではデータと用いる変数について説明した上で、第4章で予備的分析を行う。第5章で分析結果を報告し、最後に第6章で考察と今後の課題について述べる。

## 2. 使用する概念と先行研究

本研究で使用する4つの概念(SOC、レジリエンス、リーダーシップ自己効力感と制御焦点理論)の定義を行った上で、SOCに関連する先行研究を整理する。SOCに加えて、レジリエンス、リーダーシップ自己効力感と制御焦点理論の3つの概念を取り上げる理由は、SOCとの差異や関連性を探るためである。

### (1) 4つの概念・用いる尺度

#### ① SOC(首尾一貫感覚)

イスラエルの健康社会学者アントノフスキーが提唱した健康生成論(salutogenesis)の中核概念である。アントノフスキーはSOCを「人が、広範囲にわたる、力動的ではあるが永続的な次の3つの信頼の感覚を持っている程度を表す、包括的な志向性」(藤里・小玉、2011)と定義している。SOCは3つの下位尺度、具体的には自分の置かれている状況を理解し、説明や予測が可能である「把握可能感」(comprehensibility)、困難な状況であっても、先に進める能力が自分には備わっており、何とかやっていけると思える「処理可能感」(manageability)と、今行っていることが自分の人生に意味のあることで、一定の犠牲を払うに値すると感じられる「有意味感」(meaningfulness)から構成される。

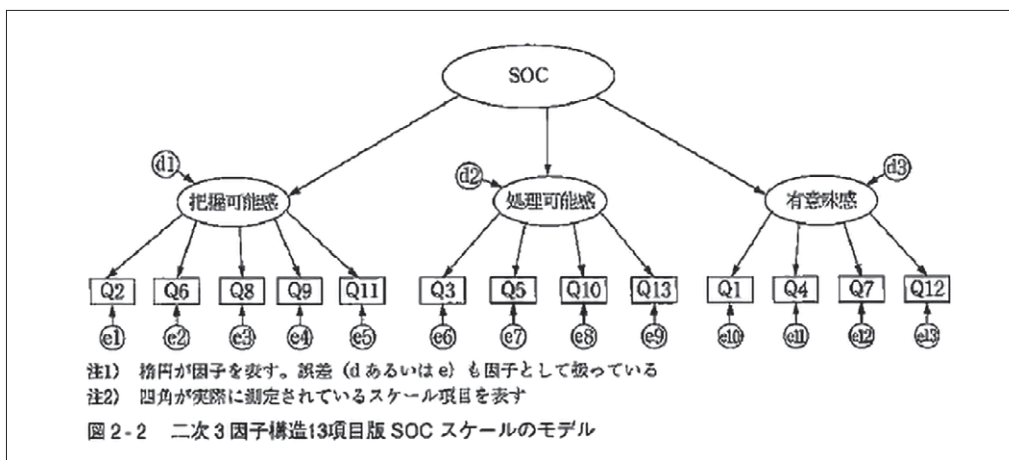


図1 SOC (13 項目版) の尺度構成：二次 3 因子構造  
 (出典) 山崎・戸ヶ里・坂野 (2019, p. 29)

山崎・戸ヶ里・坂野 (2019, p. 12) では、SOCは「類似する他の自己概念…… (略) ……、例えば、自己を価値ある存在と思う気持ちを意味するセルフエステーム (self-esteem、自尊感情) や、必要とされている行動を自分は実現できるという確信を意味するセルフエフィカシー (self-efficacy、自己効力感) といった概念の尺度構成項目は、基本的に「あなたは、自分をどう見えていますか」というトーンの問題であるのに対し、SOCでは、「あなたは、自分の生活世界をどう見えていますか」と問うている。SOCが、性格でも自己イメージでも自己意識でもなく、…… (略) ……、環境と自己や主体との相互作用からなる生活世界に対するその人の感覚や向き合い方であることがうかがえよう。」とある。蝦名 (2016) は、「把握可能感」を「わかる感」、「処理可能感」を「できる感」、そして「有意味感」を「やるぞ感」と、わかりやすく再定義している。

尺度は、山崎 (1999) が開発したSOCスケールの簡易版 (13項目) を使用した。図 1 にあるように、把握可能感 (5項目)、処理可能感 (4項目)、有意味感 (4項目) から構成される。指定された逆転項目を逆転して合計点を求めて、下位尺度 3 因子の得点とした。なお SOC スケールの簡易版 (13項目) は 7 件法となっているが、今回はテストケースでもあり、学生にかかる負荷を回避する目的で、回答は 4 件法で求めた。得点が高いほど、ストレス対処力である SOC が高いことを意味する。

## ② レジリエンス

平野 (2010) は、レジリエンスを「困難で脅威的な状態にさらされることで一時的に心理的不健康の状態に陥っても、それを乗り越え、精神的病理を示さず、よく適応している」(小塩・中谷・金子・長峰、2002) 状態のことを指す概念と定義している。換言すれば、

レジリエンスは、困難で脅威を与える状況にもかかわらず、うまく適応する過程や能力、適応の結果のことである。

代表的な尺度には、平野 (2010) や斎藤・岡安 (2010) がある。本研究では、SOCとの関連を探る目的があるため、生得的なものか後天的なものかに着目した平野尺度ではなく、「コンピテンス」、「ソーシャルサポート」、「肯定的評価」、「親和性」と「重要な他者」の5変数から構成される斎藤・岡安尺度を用いる。

### ③ リーダーシップ自己効力感 (leadership self-efficacy)

バンデューラ (Albert Bandura) が提唱した自己効力感 (self-efficacy) は、価値ある目標に向かって、自分は業務を遂行できる、自分はできるというという自己に対する確信で、「自分はできる」という効力予期と、「望ましい結果が得られる」という結果予期という2つのプロセスを経て自己効力感は形成されるといわれる。

自己効力感には、長期的視点でみた、個性に近い概念の特性的自己効力感 (generalized self-efficacy) や、進路選択領域にあてはめる「進路選択自己効力感」 (career decision-making self-efficacy) など諸概念があるが、リーダーシップ行動にあてはめた概念が、リーダーシップ自己効力感である。リーダーシップ自己効力感とリーダーシップ行動の発揮に関して、正の相関があることが明らかになっている (McCormick, Tanguma, and López-Forment, 2002)。

尺度は、武田・溝上 (2018) 尺度を用いる。武田・溝上 (2018) では「変革力」「鼓舞力」「共感力」と「遂行力」の4変数から構成されている。

### ④ 制御焦点理論

Higgins (1997) が提唱した理論で、動機づけに関する理論の1つである。制御焦点理論 (regulatory focus theory) によれば、人々がどのように動機づけられるかには、理想や希望の実現を目指す「促進焦点」 (promotion focus) と、義務および責任に注意する「予防焦点」 (prevention focus) という2つの自己制御の志向性があり、それぞれに望ましい目標追求方略が採用されると制御適合が生じ、自身の活動は正しいと感じ、その活動を活発化させる、という。促進焦点は、利益を最大化するような行動や判断に動機づけられ、目標に対して利得接近的な方略 (eager strategy) を取る傾向にあること、逆に、防止焦点は、失敗や損失の回避に関心があり、目標に対して損失回避的な方略 (vigilant strategy) を取り、損失を最小化するような行動や判断に動機づけられるといわれている。

尺度は、尾崎・唐沢 (2011) を用いる。

## (2) SOCに関する先行研究

概して、主観的健康観、ストレスとの関連をみる先行研究が多い。小銭・松村（2015）は、SOCと自尊感情に正の相関があることを、木村・山崎・石川他（2001）では、SOC得点を高める要因として、自己に原因を帰属させる傾向が強いこと、サポートネットワーク数が多いこと、小中学生時に支援的な家庭に育つことや中学・高校時期の学校生活について高く評価する項目が多いことなどを指摘している。

大学生を対象とした研究は、スポーツ競技者を対象とするものが多く（浅沼、2016など）、ソーシャルスキル、ソーシャルサポートと高い相関をもつことが示されている。女子大学生に注目したものは管見の限り、ない。また、高齢者を対象に、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの分析方法を用いてSOCの規定要因について分析・検討を行った大淵（2017）は、「子ども時代の人生経験」や「成人期の人生経験」といった過去の経験が「現在のSOC」に影響を与えることや、「現在の社会参加」が「現在のSOC」に正の影響を与えることを明らかにした。

## 3. データと用いる変数

### (1) 対象者

調査実施に際して、下田歌子記念女性総合研究所運営会議で承諾いただいた後、本調査に賛同した研究所有志の兼務研究員が、本学在学学部生を対象にGoogle Formにより実施した（回答は1回のみと設定）。調査依頼は、2020年度後期第1回目の授業で、①この調査は無記名、得られたデータは研究目的のみに使用し、それ以外には使用しないこと、②この調査によって収集されたデータは、統計データに変換し、集計データとして分析すること、③結果に関する発表・公表に関して回答者が特定されないこと、④調査へ協力は回答者が自由に決められること、⑤回答しなくても何ら不利益を被ることはないこと、などを伝えた上で同意した学生のみ回答する方法とした。実施期間は9月21日から9月30日である。

なお、本研究は実践女子大学研究倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号 H2020-10）。

### (2) 仮説

仮説1 SOCを構成する3変数は、相関が高いだろう。

仮説2 SOC、レジリエンスとリーダーシップ自己効力感の3変数は、相関が高いだろう。

仮説3 SOCと制御焦点理論の促進焦点因子とは、相関が高いだろう。

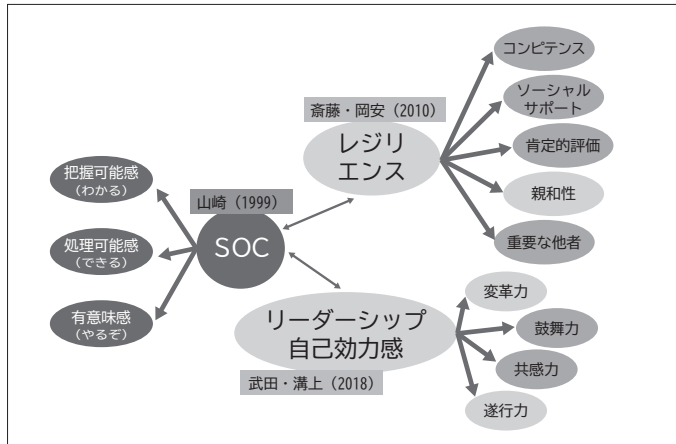


図2 分析の枠組み  
 (注) 制御焦点理論との関わりに関する先行研究がないため、図2に制御焦点理論は割愛している。

## 4. 予備的分析

### (1) 対象者の属性

大学1年生と大学2年生がそれぞれ4割、大学3年生が17%、大学4年生は3%と、1・2年生が8割を占める。

サークルの参加状況ではいずれの学年も「活動していない」が過半数を占めている。

入学形態では、いずれの学年も「AO・推薦型」が過半数を占めている。入学年度が直近になるほど、その比率は高くなる傾向にある。

藤里・小玉 (2011) では、SOCの感覚が高い者ほど、就職活動における成長感にプラスの影響を与えることを示唆していた。それらとの関連をみるために、上記変数を取り上げた。

表1 学年×サークルの参加状況・入学形態

	大学1年		大学2年		大学3年		大学4年	合計		
	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	実数	比率	
サークル参加状況	大学で運動系	40	16.2	29	11.5	25	22.9	2	96	15.3
	大学で文化系	33	13.4	56	22.1	20	18.3	3	112	17.9
	地域で運動系	5	2.0	9	3.6	1	0.9	0	15	2.4
	地域で文化系	2	0.8	1	0.4	5	4.6	2	10	1.6
	活動していない	167	67.6	158	62.5	58	53.2	10	393	62.8
	合計	247	100.0	253	100.0	109	100.0	17	626	100
入学形態	AO・推薦型	173	72.1	152	62.0	57	53.8	4	386	63.5
	一般選抜	54	22.5	77	31.4	34	32.1	6	171	28.1
	センター利用	13	5.4	16	6.5	15	14.2	7	51	8.4
	合計	240	100.0	245	100.0	106	100.0	17	608	100.0

(注) 大学4年生はサンプルが100に満たないため、比率は示していない。

## (2) SOCに関する予備的分析

データの分布状況、下位尺度間の相関などについて確認する。

### ① データの分布状況

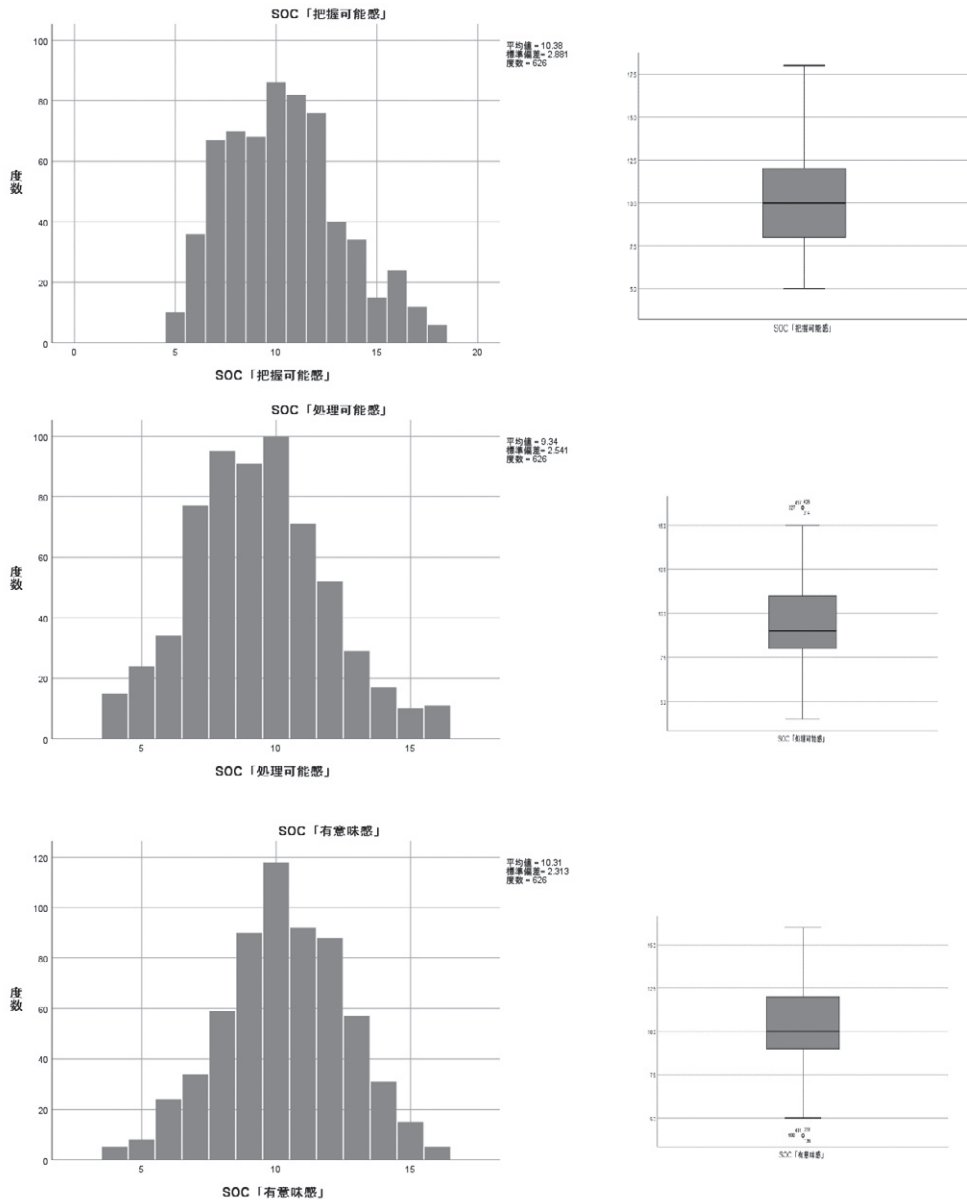


図3 ヒストグラムと箱ひげ図(上段：把握可能感、中段：処理可能感、下段：有意味感)

(注) 右側の「箱ひげ図」の見方：

箱の横線=中央値、箱の下のヒゲ=小さい値から数えて総数の1/4番目に当たる第1四分位、箱の下のヒゲ=3/4番目に当たる第3四分位



## ② 相関

表2 SOC下位尺度3因子の相関

	平均	標準偏差	SOC「把握可能感」	SOC「処理可能感」	SOC「有意味感」
SOC「把握可能感」	10.38	2.881	1		
SOC「処理可能感」	9.34	2.541	.666**	1	
SOC「有意味感」	10.31	2.313	.376**	.445**	1

\*\* 相関係数は1%水準で有意（両側）。

### (3) レジリエンス、リーダーシップ自己効力感と制御焦点理論の因子分析

3つの概念の因子分析（すべて主因子法、プロマックス回転）結果を説明する。

レジリエンスは5因子が抽出された。

第1因子は「どんなに困難な場面であっても、私は諦めない」や「努力すれば、立派な人間になれると思う」などが高いので「努力・頑張る」因子と命名した（ $\alpha = .838$ ）。

第2因子は「何事も悪いことばかりでないと、楽観的に考える」や「どうにもならないことに関しては、あれこれと考え込まない」などが高いため「楽観・肯定的」因子と命名した（ $\alpha = .803$ ）。

第3因子は「今までの人生で、私にとって重要な人と出会ったと思う」や「私の人生に、良い影響を与えてくれた人がいる」などが高いので「重要な他者の存在」因子と命名した（ $\alpha = .796$ ）。

第4因子は「辛い時には、誰かに話を聞いてもらうことが多い」や「自分が悲しい時であっても、人に助けを求めることはしたくない（r；反転項目）」などが高いため「サポートあり」因子と命名した（ $\alpha = .787$ ）。

そして第5因子は「人と話すことは、苦にならない」や「いろいろなことを周りの人と話すことが好きだ」などが高いため「他人と親和」因子と命名した（ $\alpha = .739$ ）。

5因子ともに、内的一貫性を示す $\alpha$ 係数は十分な値を示した。



表3 レジリエンスの因子分析結果

	因子				
	1	2	3	4	5
	努力・頑張る	楽観・肯定的	重要な他者の存在	サポートあり	他人と親和
Q3-15	.755	.034	.024	-.116	.018
Q3-16	.730	-.092	-.020	.149	-.085
Q3-13	.675	-.025	-.027	-.006	.088
q302	.673	.153	.252	-.201	.001
Q3-10	.581	.030	.214	-.104	-.064
Q3-7	.579	.070	.087	-.050	.081
Q3-4	.504	.130	.116	-.027	-.026
Q3-9	-.017	.762	.135	-.059	-.046
Q3-21	-.176	.743	-.113	.099	-.063
Q3-22	-.051	.720	-.098	-.039	.095
Q3-11	.236	.612	-.090	.031	-.112
Q3-3	.093	.607	-.035	-.058	.105
Q3-8	.053	-.090	.964	-.202	-.048
Q3-18	-.021	-.015	.726	-.010	-.012
Q3-12	-.091	-.102	.689	.117	.018
Q3-6	.019	.099	.382	.360	.050
Q3-17	.107	.015	-.096	.735	.001
q319	-.012	.050	.180	.662	.070
Q3-23	.027	.035	.253	.608	-.004
Q3-20	-.099	.037	.245	.439	.092
Q3-25	.068	.048	.309	.405	.060
Q3-5	.078	-.032	.001	-.104	.837
Q3-1	-.114	-.036	.003	.032	.781
Q3-14	.094	.095	-.060	.060	.515

因子相関行列					
因子	1	2	3	4	5
1	<b>.838</b>				
2	.617	<b>.803</b>			
3	.565	.444	<b>.796</b>		
4	.321	.305	.622	<b>.787</b>	
5	.507	.538	.598	.482	<b>.739</b>

(注) 対角線上の数値は $\alpha$ 係数を示している

リーダーシップ自己効力感は3因子が抽出された。

第1因子は「グループ全体に呼びかけて、奮起をうながす話をする」や「みんなのところが1つになるように、夢や希望を語る」などが高いので「奮起・鼓舞」因子と命名した( $\alpha = .859$ )。

第2因子は「進行状況を見て、必要に応じて計画の軌道修正をする」や「作業や活動がう

まくいかないときに、その原因や解決策を考える」などが高いため「軌道修正(変革)」因子と命名した( $\alpha = .815$ )。

そして第3因子は「グループの活動に貢献した他のメンバーを賞賛する」や「他のメンバーが成果を上げたとき、こころから喜ぶ」などが高いため「賞賛(共感力)」因子と命名した( $\alpha = .780$ )。

3因子ともに、内的一貫性を示す $\alpha$ 係数は十分な値を示した。

表4 リーダースhip自己効力感の因子分析結果(主因子法、プロマックス回転)

	パターン行列 <sup>a</sup>		
	因子		
	1	2	3
	奮起・鼓舞	軌道修正(変革)	賞賛(共感力)
Q4-14	.943	-.118	-.042
Q4-12	.750	-.123	.105
Q4-15	.700	.011	.076
Q4-16	.621	.092	.058
Q4-13	.608	.162	.007
Q4-4	.535	.150	-.160
Q4-5	.377	.283	-.087
Q4-10	-.008	.773	-.031
Q4-8	-.065	.704	.018
Q4-7	-.012	.656	.050
Q4-9	.050	.611	-.007
Q4-11	.061	.589	.033
Q4-6	.094	.475	.039
Q4-2	-.104	.043	.829
Q4-1	.018	.038	.723
Q4-3	.112	-.033	.641

因子抽出法：主因子法  
 回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

因子	因子相関行列		
	1	2	3
1	<b>.859</b>		
2	.596	<b>.815</b>	
3	.326	.398	<b>.780</b>

因子抽出法：主因子法  
 回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法  
 (注) 対角線上の数値は $\alpha$ 係数を示している

制御焦点理論は4因子が抽出された。促進焦点が2因子、抑制焦点が2因子である。

第1因子は「どうやったら自分の目標や希望をかなえられるか、よく想像することがある」や「私はたいてい、将来自分が成し遂げたいことに意識を集中している」などが高いの

で「促進\_将来」因子と命名した ( $\alpha = .783$ )。

第2因子は「怖れている悪い出来事が自分にふりかかってくる様子を、よく想像する」や「自分の責任や役割を果たせないのではないかと、よく心配になる」などが高いため「抑制\_心配」因子と命名した ( $\alpha = .695$ )。

第3因子は「私はたいてい、悪い出来事を避けることに意識を集中している」や「どうやったら失敗を防げるかについて、よく考える」などが高いため「抑制\_失敗を防ぐ」因子と命名した ( $\alpha = .660$ )。

そして第4因子は「大学での私は、学業で自分の理想をかなえることを目指している」と「どうやったら良い成績がとれるかについて、よく考える」が高いため「促進\_学業集中」因子と命名した ( $r = .408$ )。

4因子のうち、第2因子と第3因子の  $\alpha$  係数が高くないが、そのまま用いる。

表5 制御焦点理論の因子分析結果 (主因子法、プロマックス回転)

	因子			
	1 促進_将来	2 抑制_心配	3 抑制_失敗を防ぐ	4 促進_学業集中
Q5-1	.742	.059	.018	-.035
Q5-3	.719	-.077	.033	-.016
Q5-5	.680	-.140	.094	.004
Q5-11	.512	.262	-.186	.115
Q5-8	.467	-.052	.077	.177
Q5-13	.449	.103	.003	.013
Q5-7	-.041	.699	.091	-.047
Q5-6	.035	.597	-.021	.033
Q5-15	.088	.597	.086	-.044
Q5-2	.089	.040	.637	-.181
Q5-4	.198	-.019	.601	-.007
Q5-16	-.200	.157	.481	.089
Q5-14	-.148	.046	.415	.262
Q5-9	.145	-.013	-.157	.608
Q5-10	.075	-.031	.161	.603

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

因子相関行列				
因子	1	2	3	4
1	<b>.783</b>			
2	.040	<b>.695</b>		
3	-.004	.579	<b>.660</b>	
4	.440	.334	.327	<b>r = .408</b>

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

(注) 対角線上の数値は  $\alpha$  係数を示している

## 5. 分析結果

### (1) RQ1：SOCは基本的属性(学年、サークルの参加状況、入学形態)により得点に差はあるか

本研究で用いたSOC、レジリエンス、リーダーシップ自己効力感と制御焦点理論の4つに関して、学年、サークルの参加状況、入学形態別に平均の差の検定を行った。

これら基本的属性別に有意な差が出たのが、レジリエンスやリーダーシップ自己効力感である。

SOCでは、「有意味感」で統計的に有意に、地域で文化系のサークル活動を行っている、高くなる傾向が確認された。

レジリエンスは、総じて、高学年になるほど、高くなる傾向にある。サークル活動の効果は、SOCと同様である。入学形態による違いは確認されなかった。

表6 4つの概念の平均の差の検定(学年、サークルの参加状況、入学形態)

		基本的属性		
		学年(1-3年)	サークルの参加状況	入学形態
SOC	把握可能感	n.s.	n.s.	n.s.
	処理可能感	n.s.	n.s.	n.s.
	有意味感	n.s.	***地域で文化系	n.s.
レジリエンス	Resi「努力・頑張る」	*2年、1年<3年	***地域で文化系	n.s.
	Resi「楽観・肯定的」	*2年、1年<3年	*	n.s.
	Resi「重要な他者の存在」	n.s.	**地域で文化系	n.s.
	Resi「サポートあり」	n.s.	***	n.s.
	Resi「他人と親和」	+	***地域で文化系	n.s.
リーダーシップ自己効力感	Leader「奮起・鼓舞」	***2年、1年<3年	***地域で文化系	n.s.
	Leader「軌道修正(変革)」	*2年、1年<3年	**地域で文化系	**センター利用
	Leader「賞賛(共感力)」	**2年<1年、3年	n.s.	n.s.
制御焦点理論	制御焦点「促進_将来」	n.s.	*地域で文化系	n.s.
	制御焦点「抑制_心配」	n.s.	**大学で文化系、活動していない、地域で文科系	n.s.
	制御焦点「抑制_失敗を防ぐ」	n.s.	***活動していない、大学で文化系	n.s.
	制御焦点「促進_学業集中」	**3年、2年<1年	n.s.	n.s.

(注1) 4年はサンプル数が少ないため、割愛した。

(注2) \*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , + $p < .1$ であることを示す。以下、同様。

リーダーシップ自己効力感は、奮起したり、軌道修正したり、共感する力は、レジリエンス同様、高学年になるほど高くなる傾向にある。地域で文化系に関与していると高くなる結果も確認された。入学形態では、センター利用で入学してきた学生はリーダーに求められる「軌道修正（変革）」力が他の入学形態の学生に比べて、統計的に有意に高くなることが確認された。

制御焦点理論では、「怖れている悪い出来事が自分にふりかかってくる様子を、よく想像する」や「自分の責任や役割を果たせないのではないかと、よく心配になる」からなる「抑制\_心配」因子で、地域で文化系に関与している学生が最も得点が高くなった。予想と異なる結果ではあるが、大人に混じって活動する中で、自分の責任や役割をちゃんと果たしているのだろうか自分と対峙し、省察しているために、得点が多くなっていることも考えられる。

「私はたいてい、悪い出来事を避けることに意識を集中している」や「どうやったら失敗を防げるかについて、よく考える」などが高い「抑制\_失敗を防ぐ」因子は、サークル活動をしていない、または大学で文化系の活動をしている学生で高い。

## (2) RQ2：SOCはレジリエンス、リーダーシップ自己効力感や制御焦点理論とどのような関連があるか

表7より、

- ・ 概念間相関は、概して、いずれも高い。
- ・ SOC「有意味感」因子が高いと、総じて、レジリエンス力が高い
- ・ レジリエンス「努力・頑張る」因子が高いと、総じて、リーダーシップ自己効力感が高い
- ・ リーダーシップ「奮起・鼓舞」因子や「軌道修正（変革）」因子が高いと、制御焦点理論「促進\_将来」因子が高くなる、などが読み取れる。
- ・ SOCとレジリエンスとは近い概念であるが、SOCとリーダーシップ、制御焦点理論は、近い概念ではないようだ。

などが明らかになった。これらから、SOC「有意味感」には他の変数との関連が高いことが推測される。「有意味感」とは、今行っていることが自分の人生に意味のあることで、一定の犠牲を払うに値する、と感じられる概念である。そこで、このSOC「有意味感」に、どの変数が有意な影響を与えるのか、階層的回帰分析を行い検討する。

なお、基本的属性の変数は、下記のように割り当てた。

学年：大学1年生＝19歳、大学2年生＝20歳、大学3年生＝21歳

サークル活動ダミー：「地域で文化系」＝1（地域活動D）、その他＝0

入学形態：「センター利用型」＝1（センター入試D）、その他＝0

表7 SOC、レジリエンス、リーダーシップ自己効力感と制御焦点理論の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
1 SOC「把握可能感」	1														
2 SOC「処理可能感」	.666**	1													
3 SOC「有意味感」	.376**	.445**	1												
4 Resi「努力・頑張る」	.273**	.290**	.518**	1											
5 Resi「楽観・肯定的」	.376**	.331**	.335**	.500**	1										
6 Resi「重要な他者の存在」	.122**	.215**	.463**	.477**	.303**	1									
7 Resi「サポートあり」	.106**	.172**	.405**	.372**	.282**	.635**	1								
8 Resi「他人と親和」	.240**	.221**	.430**	.436**	.419**	.468**	.431**	1							
9 Leader「奮起・鼓舞」	.160**	.106**	.348**	.496**	.429**	.318**	.289**	.504**	1						
10 Leader「軌道修正(変革)」	.194**	.155**	.301**	.457**	.392**	.296**	.239**	.326**	.564**	1					
11 Leader「賞賛(共感力)」	.122**	.216**	.334**	.367**	.347**	.394**	.321**	.344**	.298**	.355**	1				
12 制御焦点「将来+	0.065	.088*	.388**	.586**	.333**	.325**	.304**	.299**	.432**	.444**	.267**	1			
13 制御焦点「心配-	-.431**	-.380**	-.218**	-.186**	-.280**	-.086*	-.101*	-.212**	-.134**	-0.030	0.017	.100*	1		
14 制御焦点「失敗を防ぐ-	-.230**	-.204**	-.208**	-.157**	-.165**	-0.062	-0.052	-.168**	-.093*	-0.005	0.021	0.047	.477**	1	
15 制御焦点「学業集中+	-0.005	0.027	.267**	.344**	.111**	.170**	.140**	.109**	.261**	.229**	.199**	.440**	.188**	.226**	1

\*\*、相関係数は1%水準で有意(両側)です。

\*、相関係数は5%水準で有意(両側)です。

(注) .4以上の相関があるセルにハイライトを入れた。

Model1には基本的属性を、Model2にはSOCの他の2因子得点を、Model3には、今回用いたレジリエンス、リーダーシップ自己効力感と制御焦点理論の因子を投入して階層的回帰分析を行った。

Model1では、地域活動をしているほど、「有意味感」が高い。

Model2では、地域活動Dに加え、SOCの2変数も有意にプラスの影響を与える。

Model3では、SOCの2変数に加え、レジリエンス「努力・頑張る」因子、「重要な他者の存在」因子、「サポートあり」因子や「他人と親和」因子が、制御焦点理論からは「促進\_将来」因子と「促進\_学業集中」が有意にプラスの、「抑制\_失敗を防ぐ」は有意にマイナスの影響を与える結果となった。

表8 SOC「有意味感」に帯する階層的回帰分析の結果

		Model1			Model2			Model3		
		共線性の統計量			共線性の統計量			共線性の統計量		
		ベータ	許容度	VIF	ベータ	許容度	VIF	ベータ	許容度	VIF
基本的属性	年齢	-.032	.982	1.018	-.013	.980	1.021	.002	.929	1.076
	地域活動D	.109 **	.975	1.025	.116 **	.971	1.029	.049	.910	1.098
	センター入試D	-.009	.973	1.027	-.004	.973	1.028	-.020	.940	1.064
SOC	SOC「把握可能感」				.129 **	.555	1.800	.107 *	.483	2.069
	SOC「処理可能感」				.355 ***	.554	1.805	.224 ***	.503	1.988
関連変数	Resi「努力・頑張る」							.123 **	.419	2.387
	Resi「楽観・肯定的」							-.058	.581	1.720
	Resi「重要な他者の存在」							.152 ***	.472	2.120
	Resi「サポートあり」							.103 *	.537	1.861
	Resi「他人と親和」							.093 *	.569	1.757
	Leader「奮起・鼓舞」							.016	.502	1.991
	Leader「軌道修正(変革)」							.007	.564	1.774
	Leader「賞賛(共感力)」							.053	.700	1.429
	制御焦点「将来+							.133 **	.522	1.917
	制御焦点「心配-							-.017	.590	1.695
	制御焦点「失敗を防ぐ-							-.115 **	.734	1.362
	制御焦点「学業集中+							.132 ***	.714	1.401

a. 従属変数 SOC「有意味感」

(注) VIF: Variance Inflation Factor、独立変数間の多重共線性を検出するための指標の1つ。  
一般的にVIF統計量が10以上のとき、多重共線性が存在している可能性が高いとされる。



## 6. 考察と今後の課題

本研究は、本学でどのような女子大学生を育てたいのか、という問いから始まった。混沌とした現代社会を生き抜いていくためには、何が起こっても対処できると思える準備が出来ているSOCや、レジリエンスが高いこと、自己効力感が高く、明るい面に焦点をあてた行動が出来ることではないか、との仮説をたてて調査を実施した。

SOCの下位尺度3因子の相関は .38～.67と、高い値を示し、仮説1は支持された。また、SOC「有意味感」はレジリエンス尺度とほぼ .4以上の相関を示したが、SOC「把握可能感」やSOC「処理可能感」の相関係数はそれほど高くなかった。仮説2は一部支持された。また、予想に反して、SOCと制御焦点理論の促進焦点は、それほど高い相関は示さなかったが、階層的回帰分析では一部、有意な結果を示した。仮説3は一部支持された。

また、階層的回帰分析からは、学年が高くなるほど、正課外活動として地域を拠点に活動しているほど、そして入学経路がセンター入試であれば他の経路に比して、下田が説いた「内は剛に、外は柔なるぞよき」に近い資質能力を備えている様子が窺えた。今回は試行として位置づけられた研究であったため、基本的属性は大まかなものであったが、たとえば学部学科、高校生の頃の祭り参加度合いや現在のご近所さんとのつきあい方、経験知の高さ、ゼミ活動への関与度、さらに好奇心などを含む非認知能力との関連も要検討だろう。

高校生を対象に3年間にわたり9回のパネルデータを収集した山崎・戸ヶ里・坂野(2019、p. 47)によると、このSOC得点は二次曲線を描くという(図4参照)。SOC概念の提唱者であるアントノフスキーは「SOCは30歳くらいまでで成長が止まり、それ以降は変化しない」(山崎・戸ヶ里・坂野(2019、p. 47))と述べている。これは逆にいえば、30歳くらいまでは成長する、ということである。それならば、新しい生活様式の時代を生き抜いていく本学女子大学生を対象としたSOC研究を継続し、SOCの規定要因、結果変数などを探り、女子大学生のSOCを高めて社会生活に送り出すことは可能であろう。学祖下田歌子先生の教えを体現すべく、次年度以降、引き続き、SOCに関する研究を継続し、要因を検討していく。

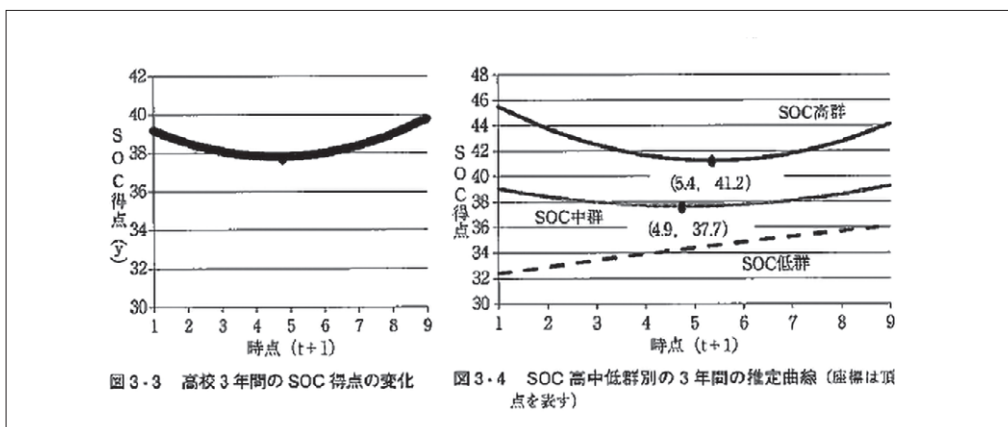


図4 SOC得点の推移：高校生、3年間継続調査  
(出典)山崎・戸ヶ里・坂野(2019, p. 47)

本研究は、「学生ファースト」と位置づける本学の教育方針やJ-TASによる入学から卒業後のキャリア・成長サポートとの関わりについて、示唆を与えうる研究の1つと考える。

## 謝辞

本アンケート調査に回答いただきました皆さま、実施に際してご尽力・ご協力いただきました下田歌子記念女性総合研究所所長広井多鶴子先生はじめ兼務研究員の先生方など、すべての皆さまに心より御礼申し上げます。広井多鶴子先生からは調査票作成時に、また細江容子先生からは初稿に対して有益なコメントを頂きました。また「内は剛に、外は柔なるぞよき」の出典に関しまして下田歌子記念女性総合研究所課長の金田ひろみ氏にご尽力いただきました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

## 参考文献

- 浅沼徹 (2016) 大学生アスリートにおける首尾一貫感覚の要因と機能に関する研究、筑波大学大学院人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻(博士論文)
- 蝦名玲子 (2016) 「生き抜く力」の育て方：逆境を成長につなげるために、大修館書店
- 大瀨守正 (2017) 高齢者の首尾一貫感覚 (SOC) の規定要因に関する研究；修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに準じた分析を用いて、東北教育心理学研究、14、21-36
- 尾崎由佳・唐沢かおり (2011) 自己に対する評価と接近回避志向の関係性：制御焦点理論に基づく検討、心理学研究、82(5)、450-458
- 尾崎由佳・後藤崇志・小林麻衣・杵澤岳 (2016) セルフコントロール尺度短縮版の邦訳 および信頼性・妥当性の検討、心理学研究、87(2)、144-154

- 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 (2002) ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性：精神的回復力尺度の作成、*カウンセリング研究*、35、57-65
- 木村知香子・山崎喜比古・石川ひろの他 12名 (2001) 大学生の Sense of Coherence (首尾一貫感覚, SOC) とその関連要因の検討、*日本健康教育学会誌*、9 (1-2)、37-48
- 故下田校長先生傳記編纂所 (1943) 下田歌子先生傳、故下田校長先生傳記編纂所
- 小銭寿子・松村咲花 (2015) 学生のストレス対処能力 (SOC) と自尊感情に関する一考察：文献レビューと試行的質問紙調査から、*名寄市立大学社会福祉学科研究紀要*、4、31-42
- 齊藤和貴・岡安孝弘 (2010) 大学生用レジリエンス尺度の作成、*明治大学心理社会学研究*、第5号、22-32
- 坂野純子・矢嶋裕樹 (2005) 大学生における首尾一貫感覚 (SOC) スケールの構造化、*日本公衆衛生雑誌*、52、34-45
- 武田佳子・溝上慎一 (2018) 大学生のリーダーシップ自己効力感に関する研究：時間的・空間的視野に着目して、*JLA 第3回研究講演会論文集*、9-10
- 戸ヶ里泰典・中山和弘 (2019) 健康への力の探究 (放送大学教材)、放送大学教育振興会
- 戸ヶ里泰典・山崎喜比古 (2005) 13項目5件法版 Sense of Coherence Scale の信頼性と因子的妥当性の検討、*民族衛生*、71、168-182
- 平野真理 (2010) レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み：二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の作成、*パーソナリティ研究*、19 (2)、94-106
- 藤里紘子・小玉正博 (2011) 首尾一貫感覚が就職活動に伴うストレスおよび成長感に及ぼす影響、*教育心理学研究*、59、295-305
- 山崎喜比古 (1999) 健康への新しい見方を理論化した健康生成論と健康保持能力概念SOC、*Quality Nursing*、5 (10)、81-88
- 山崎喜比古・戸ヶ里泰典 (2017) 健康生成力SOCと人生・社会：全国代表サンプル調査と分析、有信堂高文社
- 山崎喜比古・戸ヶ里泰典・坂野純子 (2019) ストレス対処力SOC：健康を生成し健康に生きる力とその応用、有信堂高文社
- 山崎喜比古・吉井清子 (2001) アントノフスキー著、健康の謎を解く——ストレス対処と健康保持のメカニズム、有信堂高文社
- Higgins, E. T. (1997) Beyond pleasure and pain, *American Psychologist*, 52, 1280-1300
- McCormick J. Michael, Jesus Tanguma, & Anita Sohn López-Forment. (2002) Extending self-efficacy theory to leadership: a review and empirical test, *The Journal of Leadership Education*, 1(2), 34-49

(たかはし・けいこ/下田歌子記念女性総合研究所 兼務研究員・生活科学部生活文化学科 教授)

---

---

The effects of resilience, leadership self-efficacy, and regulatory focus theory on  
sense of coherence in female Japanese university students

TAKAHASHI Keiko

This study examines the relationships between resilience, leadership self-efficacy, and regulatory focus theory on sense of coherence in female university students (year 1 to 4) using a questionnaire survey conducted in the fall of 2020 (N = 626). We performed multiple regression analyses to identify the factors influencing sense of coherence scores. We could confirm that both the resilience and regulatory focus scores had statistically significant positive effects on the sense of coherence score. However, we could not find a statistically significant effect for leadership self-efficacy on the sense of coherence score. This study is the first attempt to test sense of coherence relationships. Representative data of the population and a longitudinal approach are needed to be able to generalize our research.